

《翻訳》

フランキスクス・コルムナ
——シャルル・ノディエの最後の小説——
(その1)

前 田 祝 一

はじめに

この作品の興味はつぎの三点にしばられると思う。第一は愛書家的、書物蒐集家的興味。稀代の書狂であり、またその博学ぶりで若きロマン派たちの尊敬の的でもあったノディエは、この作品のプロローグにおいて酒脱な筆致で蘊蓄を傾けている。アルドゥス版『ポリフィルの夢』との出会いの部分は愛書家ならば胸を高鳴らせることだろう。) ノディエには、『本マニア』Le Bibliomane²⁾ (1831) なる別の短篇小説があり、その延長線上にこれを位置づけることが可能である。第二は『ポリフィルの夢』le Songe de Poliphile (《Hypnerotomachia Poliphili》³⁾, Venezia, Aldus Manutius, 1499) と、その作者フランチェスコ・コロナ Francesco Colonna への関心であろう。フランソワ・ラブレールがすでに16世紀においてこの書名を引用し、『パンタグリユエル物語』には数章にわたってこれと酷似した描写が続いているという⁴⁾。18世紀ではミラボー Mirabeau が愛読し、ルネッサンスのルネッサンスともいうべき19世紀前半では、とりわけネルヴァル Nerval がこれに夢中であった⁵⁾。1546年に、ジャン・マルタン Jan Martin (~1553) の仏訳が出版され、これに付された挿絵はアルドゥス版の原画をさらに見事に完成させており、これらの挿絵の力こそこの書の評判を高めて、そこに描かれた古代異教的な建築物の

意匠は、現存する建造物、たとえばルーヴル宮、サン＝ドニ門、ヴェルサーユ、チュイルリー等のあらゆる所に痕跡を残しているという⁶⁾。

第三点はフランチェスコとポリアの口を通して語らせたノディエの神秘思想である。すでに「詩的な資質に生まれついた人間の生は、価値においてもほぼ等しい二つの感覚の系列に分けられる。一方は覚醒時の幼覚から生ずるものであり、他方は睡眠時の幻覚によって形成されるものだ」⁷⁾ (『スマラ』 Smarra, 1821) と書き、また『睡眠の諸現象について』 De quelques phénomènes du sommeil (1831) という雑誌論文も発表していたノディエは、ポリフィルの夢物語の形式で語られた原作に興味を持ち続けたのは当然であるとしても、主人公ポリフィルを作者フランチェスコに置き換え、自分の愛書趣味を加えて書誌学的小説に仕立て上げてすら、やはりその神秘志向は滲み出ているのである。「この地上は魂が試練を受けに来るかりそめの場所にすぎない」とフランチェスコはポリアに語る。魂は転生 palingénésie する、われわれの肉体はとるに足りない。上向きの転生を繰り返して義人は神に致り、神と協力して「千年王国」を実現するだろう⁸⁾。永遠の愛の国に住まうだろう、というわけだ。

テキストは下記のものを使用した。

Franciscus Columna, la dernière nouvelle de Charles Nodier, précédée d'une étude bibliographique et littéraire de Mario Roques sur Le Songe de Poliphile, et illustrée de gravures sur bois choisies dans l'édition italienne du 《Songe》 de 1499 et l'édition française de 1546. (Les Bibliolâtres de France, les Minimes, Brie-Comte-Robert. S.-et-M.), 1949

なお適宜次のものを参考にした。

Contes de Nodier, édition de P.-G. Castex, (Classiques Garnier). 1961

(以上訳者)

諸者はおそらくわれわれの友人ロヴリック師 l'abbé Lowrich⁹⁾ のことをおぼえておられるでしょう。ほら、あのラグーザ Raguse やスプリト Spalate¹⁰⁾ で、ウィーンやミュンヘンで、ピサやボローニャやローザンヌで出会った知識の一杯つまったすばらしい人物ですよ。彼ほどに知識があるならば、むしろ自分は忘れてしまう方が幸せだと思えるくらい沢山の物事に——たとえば、つまらない本の印刷屋の名前とか、ある阿呆者の生れた年とか、その他この程度に重要な無数の瑣事に通曉している男です。スタルキウス Starkius と呼ばれていたクニックナッキウス Knicknackius¹¹⁾ の本当の名前を発見した栄誉は、ロヴリック師のもので。どうかこれは、コルヌマンヌス Kornmannus¹²⁾ の論文『スカベラの儀礼と教義について』de ritibus et doctrina scarabœorum に関してすばらしい八行の十一音綴句を作ったポリカルプス・スタルキウス Polycarpus Starkius のことではなくて、蚤に関する三十二行の十一音綴句を書いたマルティヌス・スタルキウス Martinus Starkius の方ですから、ついまでに。こういったことを除いても、ロヴリック師は、知られ愛される価値のある人です。才気煥発、情厚く、行動的かつ誠実な好意を見せます。これらの得難い資質に加えて、彼にはその会話に非常な魅力をそえる生々とした特異な想像力があります。もっともその想像力が伝記と書誌の無限小の世界に立ち入らない限りにおいてはありますが。私はこの難点を甘受しました。そして、ヨーロッパの地表上でのわが永劫の旅において、ロヴリック師に出会おうものなら、どんな遠くから見かけても彼の元に駆け寄ります。私の身にこのようなことが起きたのも、三か月も前ではないのです。

私は、トレヴィゾ Trévis¹³⁾ の〈双塔ホテル〉に前日からいました。もっとも、ここに投宿したのは夜も遅くなってからで、まだ町に足を踏み入れてはいませんでした。朝になって、階段を降りながら、私は、あのどの側から眺めてもそれなりの容貌をもつ奇妙な人物の一人が先を行くのに気付きました。整えもしないのに頭にぴったり合った、あるか無きかのごとき帽子、紐状に結んだ赤と緑のネクタイは、左側で上衣の襟元からたっぷり四プス¹⁴⁾ ははみ出し、右側ではその分消えている。スポンはといえば、片方の足はブラシが出鱈目で

あり、もう一方はブーツの折返しのところでは一種の気取りのように盛り上ってふくらんでいた。最後に巨大な書類カバン、沢山の本の題名とか注意書きとか、プランとか下書きなど、学者にとっては評価を越えているがくず屋も集めない宝物の山が、そのかかえて離さないカバンの中に入っている。間違うはずはなかったのです。それはロヴリックでした。「ロヴリック」と私は叫び、私達はもう抱き合っていました。

「君が行くところは分かっているよ」、友情の言葉をいくつか交換したあとで、彼は言いました。彼もまた私と同様に着いたばかりだとわかりました。

「君は本屋の住所をたずねていたね。エスクラヴィオン通りに住んでいますよ、アポストロ・カポドゥロ¹⁵⁾ Apostolo Capoduro は、と君に教えていたね。私もそこへ行くところなのさ。期待はしていないがね。この十年で二度その店をたずねたけれど、キアリ神父¹⁶⁾ l'abbé Chiari の小説よりも古い本などにお目にかかったためしはないんだ。昔の本屋は失せてしまった。死の中の死さ、絶滅なのさ。野蛮時代の到来さ。でも、君は彼に注文する何か特別のものでもあるのかい。

——白状すれば、と私は答えました。『ポリフィルの夢』 *Songe de Poliphile* を持ち出さずに北イタリアを去るのは、まことに辛い限りなのだ。きわめて珍しいもののようには話すのを聞いたけれども、どこかにあるとすれば、トレヴィゾにこそあるにちがいないとのことだった。

——どこかにあるとすればとは、慎重な黙説法だね。つまり、『ポリフィルの夢』、あるいはもっと適切に表現するには、フランソワ・コルムナ師の『ヒュプネロトマキア』 *Hypnerotomachia* というべきだが、これは昔の書誌学者たちが「白いカラスよりもまれな」 *Albo corvo rarior* というあの特別の呼称をつけている本なのだよ。私が君に断言できるのは、この白いカラスがどこかの鳥籠の中にいるとはいっても、もちろんそれを疑うのは不可能なのだが、それは確かにアポストロの籠の中ではないということだ。始祖アルドゥス¹⁷⁾ *Alde l'Ancien* (神よ彼をどうか永遠の栄光で包まれんことを) の霊にかけてここで誓ってもいい、私の言葉は十分に確信しているのだから。もしあの変人

のアポストロがぴったり1499年の日付の——第二版はありふれた本の序列の中にあらかた埋もれてしまっているようなものだ¹⁸⁾——『ヒュプンエロトマキア』を一部うまく君に提供できるとしたならば、つまらぬことでは気前良く口を開けない私自身の財布をほどいても、進んで君にそれを贈物としたいね」。

と同時に、私たちはアポストロの店に入っていました。アポストロは、一枚の紙の上でペンを中空に止め、深い瞑想にふけっている様子でした。結局彼は私たちの存在に気づき、良きロヴリックの忘れがたい顔を見分けて、喜びを表明しました。「おなつかしき司祭さま、と彼は抱擁しながら言いました。わが生涯で最大の死の苦境から私を引き出すために、主があなたをお遣わし下さったのでしょうか。だれもが認めているように、ヨーロッパの定期刊行物の中でもっとも学問に篤く、もっとも精神に高邁である『アドリア海文学通信』を、私が数か月前から出版していることはきっと御存知でしょうね。いやはや、この世間の感嘆の的となりわが資産を再建してくれるはずの気のきいた知的な新聞が、小六段抜きの定期欄が満たせないために明日から休刊の憂き目に脅かされていて、私が研究と事業に疲れたわが想像力に無益にも今訴えているところなのです。邪悪な精霊が私の破滅を企て、私の編集室に混乱を持ち込もうとしたのにちがいないのです。道德教育の記事を書いていた若きミューズは只今お産の床についており、全く新しい種類のカンタータを今朝届けてくれるはずだった即興詩人は、一週間以内ではまだ完成できないと手紙をよこしているし、わが国の財政と経済学の諸問題を扱っていた有能な経理家は、借金のために昨日投獄されてしまったのです。このようなわけで、神の名においてどうか親愛なる神父さま、一晩中血と汗を流してもわが脳味噌からは一行もしぼり出せなかったこのテーブルに、ついて下さいませんか。そして、たとえ二、三回以上は使えないようなニュースにすぎなくても、いい加減なものを五、六ページ分やっつけて下さいよ。

——落着き給え、とド・ロヴリック師は返事しました。我々の用件がすめば君の件に使う時間もあるだろう。われわれパリの友人とノルウェーの奥にいる私は、わざわざ怠情な即興詩人が穴を空けたカンタータの補充をするためや、

学芸欄をでっち上げるために君の所に来たのではないのだからね。旅の労苦と費用に価するあの書物の若干にでもお目にかかりたいものだと思ってやって来たんだ。紛れもないプリンケプスの良版とか、早い時期の保存状態の良い五百年代もの *quinquecentiste* とか、イギリスやフランスの製本師が余白に気を配ってくれた価値あるアルドゥス *aldin* 本の一巻とかにね。為しうるとせば、まづはこれから始めようじゃないか。そのあとで考えよう、学芸欄の方はすぐに片づくよ。

——お好きなようにどうぞ、とアポストロは答えました。それに、その方の吟味は時間は多くとらないでしょうから、喜んで私は同意しますよ。あなた方のような玄人筋にお見せするに足るものは、たったの一巻しかもっていませんから。でも、その一巻たるや……と彼は三重の包みをほどいて見栄えの美しい二つ折本を取り出しながら付け加えました。その一巻たるや、とそれを植物性の紙の牢獄から完全に引き出したとき、厳かな調子で続けました。この一巻たるや、つまり……」と、彼はその本をロヴリック師に差し出し、確信と誇りに満ちた視線を相手に注ぐのでした。

ロヴリックはいつもの習慣に従ってこの未知の宝物を一瞥の下に調べ上げて、「呪われてあれ!」、とつぶやき、それから私の方を振り向きましたが、先きほどの様子とはうって変り、両手は垂れ、眼は落ちくぼみ、額は蒼白でした。「呪われあれ!」とかろじて発声を明らかにした音の、私にしか聞き取れないようなフランス語を口ごもりました。こいつこそが、ここで出くわしたら君に進呈しようと約束したあのいまいましい本そのものさ。初版の『ポリフィル』さ……。何という裏切り者だ。しかも美しい。請合ってもいいよ、まるで印刷屋から出てきたばかりみたいだ。これはまさに私だけをねらって留保されていた運命の猛烈な一撃だ……

——安心しなさい、と私は笑いながら引き取りました。私たちはおそらくあなたが考えているよりも安い値段で手に入れますよ。

——それで、アポストロ先生はこの珍本にいったいいくら要求するのかね。

——えっ、ええ。とアポストロは言いました。時は過酷で、めったにお金の顔も拝めない。昔ならば、ウジェーヌ大公にはゼッキーノ金貨五十枚、ダブル

ンテス公には六十枚、イギリス人なら百枚を要求したでしょう。でも今日では、つまらぬミラノリーヴル四百でこれをお譲りしなけりゃなりません。丁度フランスフラン四百ですよ。カランターニを二枚も値引きしませんよ。

——飢えた四百匹のネズミがおまえの本を最後の一冊まで貪り食ってしまうがいい。一冊のつまらない古本に四百リーヴルも請求するのに、いったいどの誰がでくわしたことがあるだろうか……。

——つまらない古本ですって、とロヴリックとほぼ同じ程度に昂奮したアポストロが激しく受けて立ちました。1467年のプリンケプス、トレヴィゾで、そしておそらくイタリアで最初の版であり、活版印刷術と彫版術の最高傑作で、その挿絵はラファエロにしか帰することができないものですぞ。学者たちのいかなる探究にもかかわらず、今もまだ作者が不明のままであるすばらしい著作で、唯一の、つまりほとんど唯一の作品で、司祭様、あなた自身も多分この存在を御存知なかったでしょうが。これだけのものをつまらぬ古本とお呼びいただけるとは、いやはや、と」

ロヴリックの昂奮は、この熱っぽい長広舌の間におさまっていました。彼は書籍台の上に帽子を置き、静かに腰をおろしていました。そして、長く苦しい疲労でくたくたになり、やっと心おきなく休息できる場所を見つけた男のように、額の汗をぬぐっていました。

「終ったかい、アポストロ、と落ち着いた調子ではあるが、何かしらいたずらっぽい満足感をにじませながら言いました。つまり、君の栄光と利害のためには、そう願いたいものだということさ。何となれば、君がしゃべったばかりの四つの言葉で、君は四つのとてつもない愚言をついつい洩らしてしまったのだからね。もう少しでも続けたいのであれば、私がそれらを一つずつ要約検討するのに一日がかりでも足りないだろうよ。つまり、君にとって欠くべからざる雑誌記事を書き下ろすのに時間が残らないということさ。第一の世迷い言、それはそれなる本が1467年に印刷されたトレヴィゾ版¹⁹⁾ではないということだ。すなわち、1499年に印刷されたヴェネチア版で、最後一枚二頁分を抜き取って日付に関して君を騙したわけだ。でも私は、君の一巻の価値を半分以下も落

とすこの不完全性には注意を払わなかった。君の幸わせな運命の女神は、私がそれを修復できることをお望みになっているのだからね。何故ならば、先日私は偶然にも荷造り用の紙の中でその貴重な一枚を発見していたわけで、こんなにも早々と出くわすとは思ってもみなかった機会のために、これを丁寧に保存しておいたんだよ。私がいくらでそれを君に譲るかはすぐに分かるだろうがね。」

かく語ってロヴリック師は、紙挟みからよだれの出そうな一葉 *plagula* を抜き出し、念入りにそれを本に合わせてみたのでした。「つまり、この二つ折り分は私の本にぴったりだというわけだ、とアポストロは言いました。しかしこの品物は確かに少し変だと認めないわけにはゆかない。一体どの点でこれがトレヴィゾの初版だと想定したのだろう。

——先に移ろう、まだ終わっていないのだから、とロヴリックはさらに続けました。第二の愚言、それは、1467年の版であれ、君が今その証左を得たばかりの1499年にやっと仕上がったものであれ、この本の挿絵がラファエロに帰するというのは真実でないということだ。ラファエロは誰も疑わないが1483年にウルビノで生まれた。換言すれば、はるか1467年にさかのぼるこの原稿の完成後17年のことで、あの崇高な画家のいかなる大賛美者といえども、彼の生誕前17年に、かくも正確に、かくも優美に絵を画いたなどと仮定することはできません。だから、この美わしきものを制作したのは別のラファエロで、わが尊敬すべきアポストロ殿、それを知っているのは私だけなのさ。少し待ってくれたまえ、まだ二つしか数えていないよ。

「第三の愚昧、それは、この本の作者が今日まであらゆる学者に未知のままにいるという点は真実でない、ということだ。つまり、その正反対で、あらゆる学者は知っていて、無知なる者の大部分は、これが1467年に死んだトレヴィゾの修道院のドミニコ僧、フランソワ・コロヌあるいはコルムナの作品であるとは知らないのだ。もっとも若干の軽卒な伝記作家²⁰⁾ が彼よりも60年ほど生きながらえたほとんど同音の博識な学者フランチェスコ・ディ・コロニアとこれを混同して、つまらぬことを言っているけれどもね。二人とも君の店から二、三百歩のところに埋葬されているよ。このように君に語ったあとでは、ア

ポストロ、そのすばらしい古書の存在が私には未知であったと仮定して、君が先の三点よりも重大な第四の大錯誤に陥っているということを、君に証明してみせるのは赦免願えると思うがね。それに、私が暗唱できるほどにこれを熟知していることを君に立証するのは、何かが制止しているみたいだよ。

——今度こそは、と激しくアポストロは言い返しました。あなたにそんなことができるもんですか。というのは、トレヴィゾとヴェネチアとパドワの私の友人たちの中で、勇敢にも一頁でも解読しようと目論んだ者がいなかったぐらい、これは雑多な言語で書かれているのですからね。お言葉通りあなたがそらで語れるほどこれを御存知ならば、いさぎよくをただで差し上げて異論はありません。大いに喜こんで支払う犠牲ですよ。あなたから受けた教示がすばらしいだけにです。つまり私は、御承知の誤まった見地の下にこの一巻を私の『アドリア海文学通信』に披露しようとしていた矢先ですから。要するに私の良好な高い評判を永遠に失わせるものがあったということです。

——君が自分の口で言ったことは、とロヴリック師が答えた、我が作者の真実大いに風変りな文体に関して、またこれを解釈しようとした沢山の学者の無駄な努力に関してだが、それは、さらにこの一日が全部必要なほどのうんざりするような耐えがたき吟味検討を、君がまさに要求していることの十分な証しというところだね。ところで、私が『ヒュプンエロトマシー』のアルファからオメガまで暗唱している間、君の記事の方は一体どうなるだろう。しかし、決定的でなくはないのだが、手早く容易ではある実験に君が甘んじるつもりならば、私は君の挑戦を受けてみよう。君の本の章立ては、すでに君の忍耐力を疲労困憊させるに十分なほど数が多い。それで、各章の最初の頭文字を、第一章から始めて順次すべて君に打明けることを約束しよう。おやもう、君は指を置いたね。

——言われた如くなされかし。第一章の最初の文字は、

——Pだ。とロヴリックは答える。次の章を探したまえ。

連禱は長くかかった。しかし神父は第三八の最後の章まで一瞬もとまどうことなく、一度も間違うことなく、解きほぐしてゆきました。

「24文字²¹⁾の中から一つの頭文字を言い当てるのは、悪魔が介在しなくても大いなる偶然で成功することもありうるが、と悲しげにアポストロは評しました。しかし、連続38回この芸当を繰り返すには、いかさま細工をしておかなければなるまい。神父さま、どうかこの本をお受け取り下さい。そして、私にはもう二度と永遠にお聞かせ下さいますな。

——おお、愛書家中唯一無二のフェニックスよ、君の汚れなき純真さをこんなにまでもてあそぶのは、神も禁じておられるのでな、とロヴリックは答えました。君の見たことは、学生ならばかろうじて許される手品遊びにすぎんのだよ。つまり、君もすぐに私のようにやってみせることができるのだよ。いいかい、知っておき給え、この本の作者は38の章の頭の文字に、自分の名前、職業、愛の秘密を隠しておくのが適切だと判断したのだ。これはたがい一文を構成しているが、その秘かな意味をパリの『世界人名辞典』²²⁾ *Biographie universelle* に尋ねたりしないよう忠告しておくよ。なぜならば、私が君に勝った賭けは、やはり君の負けになるだろうからね。この単純にして感動的な文章はおまけにすぐ覚えられるものなのだ。つまり、＜ポリアム フラータル フランキスクス コルムナ ペルアマーヴィト＞ *Poliam frater Franciscus Columna peramavit*, 「フランソワ・コロヌはポリアを熱愛した。」今や君はこの点について、ベール²³⁾ *Bayle* やプロスペル・マルシャン²⁴⁾ *Prosper Marchand* と同様くわしく知ったことになるわけだ。

——これはめづらしい、とアポストロは小声で言いました。そのドミニコ僧が恋をしていたのだとは。この中には物語があるのですね。

——どうしていけないのだ、とロヴリックは言い返しました。さあ、ペンを取りたまえ、学芸欄を埋めようじゃないか。穴を空けるわけにはゆかんのだろう。

アポストロは椅子に座り直してくつろぎ、以下のように題名を立て書き始めました。余談があまりに長かったので、私はすっかりこの主題からそれてしまっていたのでした。

フランキスクス・コルムナ

——書誌学的物語——

..... (以下次号)

註

- 1) ノディエの最後の小説であるこれは、1843年に Bulletin des Amis des Arts 誌上に発表され、彼の死後1844年に Techener 書店より出版された。Jacques-Joseph Techener (1802—1873) は19世紀の最も傑出した出版業者・書籍商・愛書家であり、1834年にノディエの協力を得て月刊の「愛書家通信」Bulletin du bibliophile (1834—1864) を発刊した。天才的な目利きであった彼はフランス内外の貴重書・稀覯本を集めて、古書籍業界の発展に貢献した。彼の刊行した売立て目録は今日でも不可欠の書誌的資料である。テシュネルの所有していた個人蔵書は当時の金額で20万フランと評価されていたが、火災ですべて灰になり、貧窮裡に死亡。ノディエの死後の蔵書目録(1844)も彼の手になる。
- 2) これは、G・フロベールの『愛書狂』Bibliomanie (1837)、エルゼヴィル版『フランスの菓子職人』Le Pastissier françois をめぐるA・デュマの回想記(1852～54)、Ch. アスリノーの『愛書家地獄』L'Enfer du Bibliophile (1860)等、愛書小説ともいふべきものの端初を開いた作品である。
- 3) 渡辺一夫はこの題名を『ポリフィルス狂恋夢』と訳している(ラブレール第五之書、『パンタグリユエル物語』、岩波文庫、p. 342)。睡眠中 hypn の色事模様 erotomachia とでもなるのか。これでは謎めいているので、第二版は La Hypnerotomachia di Poliphilo, cioè pugna d'amore in sogno とやっ具体化された表題で1545年にやはりアルドゥス版として、ヴェネチアで出版された。つまりポリフィルが夢の中で愛に対して行なった戦い」と附題されたわけである。仏訳は1546年、Loys Cyaneus の印刷、Jacques Kerver の版元でパリで出版された。翻訳というよりも一種の翻案ものであったこれは、Jean Martin の筆になるといわれていたが、今日では訳者不明とすべきらしい。《Le Songe de Poliphile》(Fac-simile de la première édition française de 1546, présenté par A.-M. Schmidt, Club des Librairies de France, 1963) の Schmidt の序文 p.x および《Franciscus Columna》-la dernière nouvelle de Charles Nodier- (précédée d'une étude bibliographique et littéraire de Mario Roques, Les Bibliolâtres de France, 1949) の Roques による解説 p. 17～p. 20参照
- 4) 上記渡辺一夫『パンタグリユエル物語』p. 342、および上記 A.-M. Schmidt p. 11, Mario Roques p. 17.
- 5) 例えばネルヴァルは『東方紀行』の長い導入部の中の数章を《Le songe de Poliphile》と Francesco Colonna の紹介にあて、ノディエのこの作品にも言及している。

- 6) 上記 3) の Mario Roques の研究 p. 23-p. 32 参照。原作の挿絵の作者は不明であるが、仏訳本の木版画の制作には、Jean Goujon が参加したのは確実らしい。
- 7) 渋澤龍彦コレクション 1, 『夢のかたち』(河出書房新社) p. 240 の訳文を借用。
- 8) 『ノディエ選集』 3, (牧神社), p. 312。これは A. Viatte: Les sources occultes du Romantisme, (Champion) より第 2 巻第 4 章を抄訳したもの。田中義広訳による。
- 9) ノディエは 1812 年から 13 年にかけてユーゴスラヴィア、スロヴェニア共和国の首都リュブリャナ Ljubljana 市の図書館長の職を得、同時にイリリヤ地方官報 *Télégraphe illyrien* の編集長をつとめ、これに文学・風俗・民話・民謡などの雑多な記事を書いていた。このとき主として参考にしたのがフォルティス師 l'abbé Fortis の『ダルマティア旅行記』*Voyage en Dalmatie* であるが、1776 年にこの書の批判的注釈を書いた博学者が Lovrich なる人物で、ノディエはこの名前をよく知っていて自分のイリリア滞在期の思い出から勝手に借用しているという。Castex: Contes de Nodier (Garnier), p. 26~p. 27, および p. 882 参照。l'abbé Jean-Baptiste, dit Albert Fortis (1741—1803) はイタリアの文学者。しかし還俗後、物理、博物学、詩作等すべてをこなして、ボローニャ図書館長となった。『ダルマチア旅行記』は *Viaggio in Dalmazia* (Venezia, 1774, 2 vol) のこと。
- 10) ラグーザ Ragusa はシチリア島東南部にある同名県の県都。スプリト Split はユーゴスラヴィア北西部、アドリア海にのぞむクロアチア共和国ダルマツィア地方最大の港町。イタリア名スプラト Spalato。
- 11) 17 世紀の風変りな哲学者 Janus Cæcilius Frey の偽名だという (Castex, p. 882)。Jean-Cécile Frey (v. 1580—1631) はスイスの医師、文学者。パリに来て、哲学や医学の教師をつとめるかたわら、言葉遊びの詩作で有名になった。しかしそのドルイド教やケルト伝説の研究は先駆的価値があるという。
- 12) Henri Kornmann (?—1620) はドイツの法律家。フランクフルトで弁護士を開業する一方、雑多な著作にはげんだ。作品は *Opera curiosa* (1686) にまとめられている。
- 13) ヴェネチアの北の小都市。
- 14) 1 プスは。27.07 mm.
- 15) capoduro は硬い頭つまり石頭のこと。
- 16) l'abbé Chiari (Pierre) (?—1788) は、ヴェネチアに住み、多数の韻文喜劇を書き、Goldoni や Gozzi のライヴァルだった。またヴォルテール風の小説も書いた。
- 17) 15 世紀から 16 世紀末にかけてヴェネチアで見事な書籍を印刷し続けたアルドゥス家一族の始祖 Aldo Manuce (イタリア名 Manuzio) を Alde l'Ancien という。別名 Bassianus と呼ばれた Tebaldo Manuzio (v. 1449—1515) のこと。1489 年にヴェネチアに居を構え、印刷所を開設し、アリストファネス等ギリシャ古典を印刷出版した。1499 年の《*Hypnerotomachia*》は彼の印刷物の最高傑作と

いわれている。通常イタリックと呼ばれる傾斜体活字 (aldino) は彼の発明 (1500年)。一流の学者でもあった彼は, Erasme, Pic de la Mirandole 等を集めてアカデミア (Accademia aldina) を開きそれを主宰して自分の出版した本の批評を求め, 訂正に努力した。

- 18) 3)を参照。この第二版は Aldo Manuce の第3子 Paul Manuce (1512—1574) の印刷。
- 19) トレヴィゾ版が存在するという意見の根拠は, 最終章末尾に「トレヴィゾにて, ポリアの愛が衰れなポリフィルを崇高な絆でつなぎ留めていたときに, 1467年5月1日。」Tarvisii, cum decorissimis Poliae amore lorulis distineretur misellus Poliphilus, MCCCCLXVII Kalendis Maii. なる文があるからである。Mario Roques はこの日付の真正さを証明するものは何もない。1499年の印刷のときに挿入することも可能である, とのべている。M. Roques, 上掲書 p. 13。
- 20) 伝記作者たちは, フランキスクス・コルムナは若い時トレヴィゾのドミニコ修道院にいて, 1527年に死んだことを確認しているという。Castex, p. 887。Mario Roques によれば, 「フランチェスコ・コロンナは, おそらく1432年にヴェネチアに生まれ, 1455年からトレヴィゾのサン・ニコロ修道院のドミニコ僧であり, トレヴィゾで大学入学資格者となり, ついでパドワで教師になり, ヴェネチアの Saints Jean et Paul 修道院で大変年をとって老衰で死んだ。僧庵内の墓所に葬られ, 墓銘を刻まれる栄誉を受けた」, という。M. Roques, 上掲書 p. 13。
- 21) ギリシャ語は24文字, ラテン語は23文字 (u と v を区別すれば24文字)。
- 22) 18世紀から19世紀にかけて人名辞典の出版は流行であったが, その中でも最大のものが Michaud の《Biographie universelle ancienne et moderne》(52 vol., supplément 32vol. Paris, 1810—1828) であった。パリの『世界人名辞典』とはおそらくこれをさしていると思われる。これは Michaud (Joseph-François) (1773—1858) が多数の知識人を動員して編集し, すでに印刷所を開設していた (1797) 弟の Michaud (Louis-Gabriel) (1773—1858) が協力して出版したものである。項目はすべて署名入りの記事であるが, その正確さについては当初から大いに疑問視され, のちに大巾な改訂版 (1842—1865) が出されることとなり, この第二版にアカデミー会員の Nodier が第一巻の巻頭に序文を寄せたのだった。なお Colonna (François) の項は, 初版第9巻 p. 219—p. 320, ハッ折本横二段組の2段分を占め, Nodier が引用した文句の内の peramavit は, ここでは adamavit となっている。もちろん正しくは, peramavit。
- 23) Bayle (Pierre) (1647—1706) の Dictionnaire historique (3 vol. 1697) には, Colonna の項はない。おそらくマルシャンとの連想からこの名を引用したのだろう。
- 24) Marchand (Prosper) (v. 1675—1756) は有名な書誌学者。1698年にパリで書店を開き, フェニックスの看板で評判だった。熱烈な新教徒であったので, 1711年にアムステルダムに逃れ, 間もなく書籍商をやめ, 著述に専念した。初期の印刷術の研究である Histoire de l'origine et des premiers progrès de l'imperi-

前 田

merie (1740), ピエール・ベールの『歴史批評辞典』の続編をめざした Dictionnaire historique ou Mémoires critiques et littéraires (1758—59) などがある。なおこの辞典中の Colonna の項は、フォリオ版で10ページ分を占め、詳細をきわめたその解説はおそらく Nodier のこの小説の直接の源泉 source livresque と推定される。くわしくは次号「解題」を参照。